

ある床屋さんでのこと

子どものころ床屋さんが苦手だった人は多いだろう。私も耳の周囲や襟足のあたりにバリカンやハサミが当てられると、ギュッと首をすくめては床屋さんを困らせた。だから、知的障害や自閉症で散髪が苦手な人が多いのはよくわかる。

私の長男も幼いころから散髪には苦労した。嫌がって顔を振り、体をよじる。ハサミが目にも入ったら大変だ。私は必死になって長男が動かないように頭を押さえる。こちらは守っているつもりなのだが、長男からすればハサミやバリカンが怖くて暴れているのに、逃げられないように力で押さえつけられるから、余計に怖くなる。そして、もっと強い力で暴れる。私はさらに強い力で押さえざるを得なくなる。長男はさらに恐怖が募り、もっと強い力で暴れる。私はもっともっと強い力で押さえる。気がついたときには、わなに掛かった獣のように叫んで暴れる長男を力任せに押さえつけている私がいた。

ある夏の午後。大声で暴れる長男を押さえていた私は頭の中が真っ白になった。可愛がって育ててきた子が野獣に変わったような気がした。その瞬間。バーン！という衝撃とともに床屋さんはハサミを持ったまま吹き飛ばされた。長男は立ち上がって声を出してジャンプしている。ふと見ると、大きな重い椅子が横倒しになっていた。

床屋さんのハサミやバリカンが怖い長男に対して、力で押さえるという「身体拘束」を繰り返した結果、私は長男の行動障害を誘発し強化してしまったのである。

行動障害は以前から、障害者福祉の現場で容易に解決策が見つからない困難な課題として扱われてきた。自分の頭をこぶしで殴ったり、指をかみ続けたりする「自傷行為」、家族や職員らをたたいたり、かみついたりする「他害行為」、暴れたり奇声を発したりする「パニック」、布や紙などを食べてしまう「異食」。そんな行動障害を起こす障害者は入所施設か精神科病院の閉鎖病棟に送り込むしかないと思われていた。そこで身体拘束をされるのも、命を守るためには仕方がないと思われていた。

私だって暴れる長男を力ずくで押さえることなどしたくはなかった。しかし、そうしないとハサミで顔や目を傷つけかねないから、仕方なく押さえていたのだ。ほかに方法があれば、そんなことはしたくなかった。

しかし、正直に言うとそれはウソだ。他に方法がないのではなく、他の方法を探していなかったのだ。私が忙しくてそんな時間がなかったからである。面倒くさかったからである。誰かに頭を下げて相談することが嫌だったからである。すべて私の勝手な都合や言い訳だった。力で押さえれば、なんとかその場をしのげたからそうしていたのである。

「その場しのぎ」「カズク」が行動障害を引き起こす大きな要因になっている。その場はしのげても、本質的な解決にならない。それだけでなく、行動障害をエスカレートさせているのだ。



（表情や姿に個性あふれる人形が花束とともに献花台に置かれた＝相模原市で 2018 年 12 月 26 日、堀和彦撮影）

もの言わない障害者に押しつけられる責任

行動障害の多くは障害者本人の問題ではなく、環境や支援のあり方の方に問題がある。障害者がものを言わないから許されているだけで、ものを言わない障害者の方に責任が押しつけられているのである。

私の場合、「その場しのぎ」「カズク」のやり方が破綻したのをきっかけに、福祉施設の経営者に相談したところ、ある床屋さんを紹介された。

商店街の外れにある小さな床屋さんだった。大きな目で言葉の荒い昔かたぎのおやじさんが 1 人でやっていた。警戒している長男をなだめてなんとか鏡の前の椅子に座らせたのだが、ハサミが耳の周囲に近づくとやはり嫌がって逃げようとする。

「ここは俺がやるから、あんたはそっちで座っていればいいよ」

そう言われてわたしは待合のソファに座った。もう何でも言うことを聞くしかない。首を伸ばして、長男の姿が映る鏡を見守った。

「おっと、あぶねえ」「わかった、もうハサミは使わねえよ」……。小さな声で長男に話しかけながら、おやじさんはハサミを隠したり、そっと出して髪を切ったりしている。

そのうち、シャカシャカ……というハサミの音がして、それを嫌がる長男の声が聞こえた。そして、また沈黙。それが何度も繰り返される。1時間はとうに過ぎたころだった。

「おー、できたじゃねえか。終わったよ」

笑いながらおやじさんが長男をほめている。きれいに刈り上げられた髪をなでられ、長男もホッとした顔をしている。無理やりに力で押さえられるから怖くなって暴れる。時間をかけてリラックスするのを待ち、少し切っては、また待つ。それを何度も繰り返しながら、なんとか全体の散髪ができたのだった。

長男の横顔を見ていたら、なんだか切なくなってきた。一番苦しんでいたのは長男だったのだ。自分が暴れるために床屋さんをどれだけ困らせているのか、父親をどんなに恥ずかしくさせているのか。そんなことはよくわかっていて、それでもハサミやバリカンの感覚が我慢できなくて暴れてしまう。力で押さえられるとますます混乱し、恐怖で声を上げてしまう。それをこの床屋のおやじさんは救い出してくれた。そんなことを思っているような穏やかな横顔だった。

救世主となったおやじさんは、中学を卒業してすぐに床屋の丁稚奉公に入ったという。福祉や心理学の勉強はおろか、本などこれっぽっちも読みそうにない。どうしてこんな名人芸のような技を身につけたのか不思議だった。しかし、考えてみれば、いつどんな客がやって来るかわからず、素性のわからない客に対しても顔に刃物を当てるのが床屋さんの仕事である。毎日体を張り、神経を研ぎ澄ませて仕事をしてきた。そうして積み重ねた経験知が自閉症の長男に対しても通用するということだろうか。

それから定期的にその床屋さんに通うようになった。長男がハサミを嫌がって暴れることは見る見るうちに減っていった。うまくいったときには、「ご褒美だよ」と言ってチョコレートをくれた。長男はうれしそうな顔で食べている。〈ちょっと我慢すればこんなご褒美が待っているのか〉。そんな声が聞こえてきそうだった。

顔にシェービングクリームを塗りつけ、カミソリでひげをそられても平気になった。洗髪するときも耳の周囲に触れられるのを嫌がったのに、今では普通にできるようになった。

教育や福祉の「専門性」とはいったい何なのだろう。大学や専門学校で教えられた知識は、現実に行動障害を起こす障害者に対してどれだけ通用するのだろうか。通用しないどころか、行動障害を引き起こしたりエスカレートさせたりしているのだとすれば、いったい誰のための教育であり福祉なのだろうか。

のざわ・かずひろ 1983年早稲田大学法学部卒業、毎日新聞社入社。東京本社社会部で、いじめ、ひきこもり、児童虐待、障害者虐待などに取り組む。

夕刊編集部長、論説委員などを歴任。現在は一般社団法人スローコミュニケーション代表として「わかりやすい文章 分かち合う文化」をめざし、障害者や外国人にやさしい日本語の研究と普及に努める。

東京大学「障害者のリアルに迫るゼミ」顧問（非常勤講師）、上智大学非常勤講師、社会保障審議会障害者部会委員、内閣府 障害者政策委員会委員なども。

著書に「スローコミュニケーション」（スローコミュニケーション出版）、「障害者のリアル×東大生のリアル」「なんとなくは、生きられない。」「条例のある街」（ぶどう社）、「あの夜、君が泣いたわけ」（中央法規）、「わかりやすさの本質」（NHK出版）など。